研究紀要　第９号　57－76頁　2001年３月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

寺野東遺跡における大洞Ｃ２式期土器の文様形態

猪瀬（いのせ）　美奈子（みなこ）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　大洞式雲形文施文原則の確認
Ⅲ　寺野東遺跡出土「大洞Ｃ２式」土器群の分析
Ⅳ　寺野東遺跡における「大洞Ｃ２式」文様
Ⅴ　寺野東遺跡出土の「横位並列文様」土器群
Ⅵ　安行３ｄ式・前浦式における単位文的並列配置構成の確認
Ⅶ　まとめ

本県においては晩期中葉以降、大洞系土器群の進出が顕著に確認され、寺野東遺跡においても例外ではない。本稿では寺野東遺跡より出土した特徴的な「横位並列文様」土器群に注目し、「大洞Ｃ２式」の分析を通じて文様構造の解明を試みた。まず「大洞Ｃ２式」を文様及び文様配置から大きく２つの分類群で捉え、その中で大洞式雲形文の、本来的な施文原則とは相違する文様配置（線対称配置）がなされる土器群を明らかにし、更にここから文様の単位文的並列配置構成が導かれることを示した。「横位並列文様」土器群は「大洞Ｃ２式」の施文域に相当する部位に、単位文的並列配置構成により単沈線描出の文様を配するもので、「大洞Ｃ２式」・安行３ｄ式・前浦式の３型式間の関係性を示唆するものとして注目される。また安行３ｄ式・前浦式の中にも同様の構成を持つ土器群が存在することは注意されよう。

Ⅰ　はじめに

寺野東遺跡は栃木県南部の小山市に位置し、平成２年度からの発掘調査において、縄紋時代中期から晩期に属する多くの遺構や遺物が確認されている。特に環状盛土遺構及び谷部の木組遺構の確認は、縄紋集落及び生業研究に大きな成果をもたらしたといえる。

また土器研究上も良好な資料を提供したといえるであろう。栃木県南地域においては縄紋時代後期～晩期に属する遺跡が少なく、土器様相も不明瞭な部分が多かった。寺野東遺跡の土器群を観察することによって、本地域では晩期前葉こそ安行式土器分布圏に属しているものの、中葉以降は大洞式系土器が主体的な在り方を示すようになる事が確認された。しかし完全に大洞式土器圏に席巻されてしまう訳ではなく、安行式・姥山式・前浦式も少なからず存在し、ま

た地域的な特徴のある土器群も見られるようになる。この在り方は同じ栃木県内でも宇都宮市に所在する刈沼遺跡とは大きく異なる様相で、刈沼遺跡ではより大洞式の色彩が強まるように認識される。

筆者は寺野東遺跡の発掘調査及び整理報告に参加する機会に恵まれ、主に晩期土器群の整理・分析を試みてきた。整理を進める中で、大洞式とも安行式とも分類し難い、従来の土器編年では理解し得ない土器群（本論の「横位並列文様」土器等）に遭遇し頭を抱えた覚えがある。これらはまさに塙静夫氏の指摘された「規定の土器編年とは全く異質的内容」（塙1955）の土器と同様のものであろうと推定されたが、報告時においては時間的な余裕も無かった為、分類のみを呈示したに留まり、充分な分析をすることができなかった。また寺野東遺跡の報告は発掘区域毎の分冊形式をとったこともあり、全分冊を通しての土器群の分析を改めて行う必要も痛感するところである。

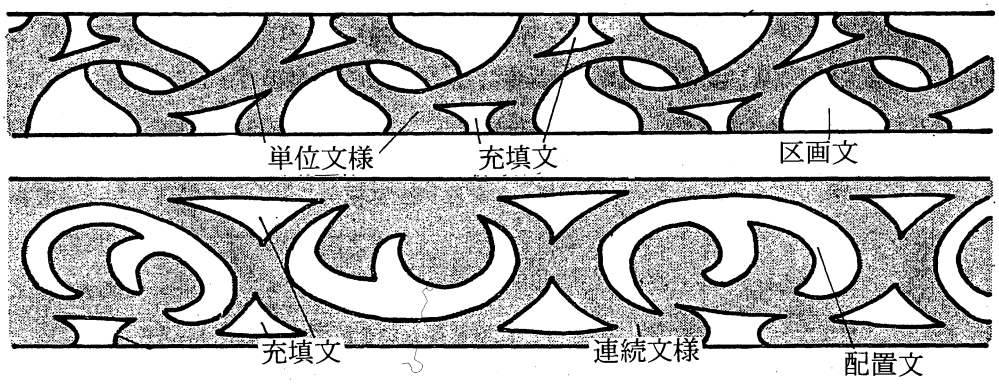
そこで今回はこの特徴的な様相の土器を提示し、当該期に主体的な在り方を示す「大洞Ｃ２式」の側からアプローチすることで、本遺跡の大洞Ｃ２式期土器群について考えてみたい。

Ⅱ　大洞式雲形文施文原則の確認

実際の分析に入る前に、大洞Ｃ１・Ｃ２式の所謂雲形文の施文原則について確認しておきたい。大洞式雲形文の研究では、藤沼邦彦氏（藤沼1989）、高橋龍三郎氏（高橋1981）の「ネガ文様」による分析方法が提示されて以降、この方法による分析が有効とされている[1]。ここでは藤沼邦彦氏の方法を紹介し、本論においての分析の参考にしたいと思う。

藤沼邦彦氏は一般に“華麗・複雑・繁辱”等と称される雲形文について、「簡単に描ける方法・手順等があったのではなかろうか」と考え、縄紋が充填される部分ではない“ネガ文様”に着目された。藤沼氏はネガ文様を区画文・配置文・充填文に分類し、それらの組み合わせで文様が構成されることを、模式図を使って簡便に示した（第１図）。

区画文（第２図）とは「ある土器の文様帯に一定の単位文様を繰り返し並べて描くとき、そ

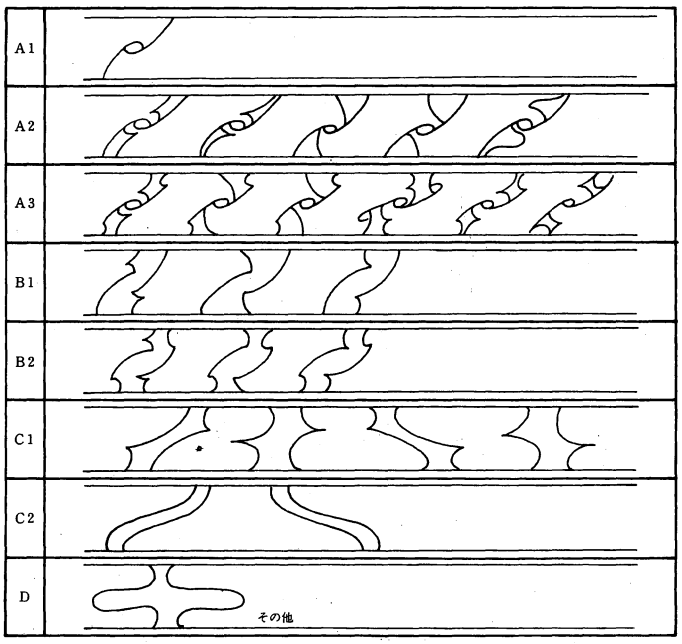


第１図　文様の名称（藤沼1994より）

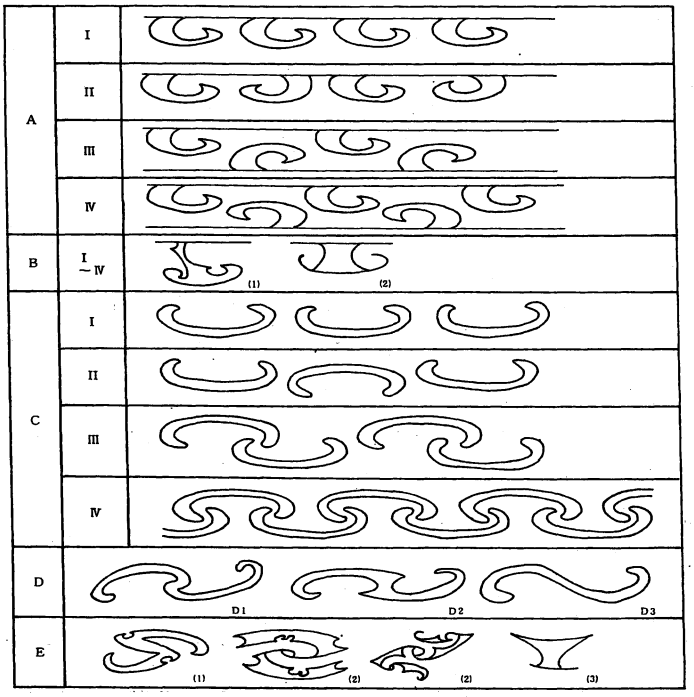
の文様帯を分割して単位文様を割り付ける働きをする文様」である。区画文＋充填文で描かれる文様は、視覚的に単位文様部に大きな効果があるようで、単位文様が主文様の位置を占めるといえる。

配置文（第３図）とは「区画文が文様帯の上・下両線に接続する形を取り文様帯を完全に横に分割するのに対し、配置文は文様帯の内部に埋め込まれるか、或いは上・下両線のいずれか一方にのみ接続する形を取る」もので、配置文は文様帯に割り付けを行うだけではなく、連続文様の内枠を構成する働きも負っているものである。配置文を使用した文様では、配置文・充填文の方がより主文様らしい視覚効果を得るものも多い[2]。

藤沼氏は実際に土器の模式図を示しながら、雲形文を描く手順と原則について、①雲形文は数種類に類型化できる区画文や配置文で文様帯を割り付けし、ついで充填文を埋め込む過程で単位文様或いは連続文様として構成される、②区画文や配置文は基本的には点対称的な構図で、単位文様部も点対称的な形をとる。充填文も点対称に配置され



第２図　区画文の種類（藤沼1989より）



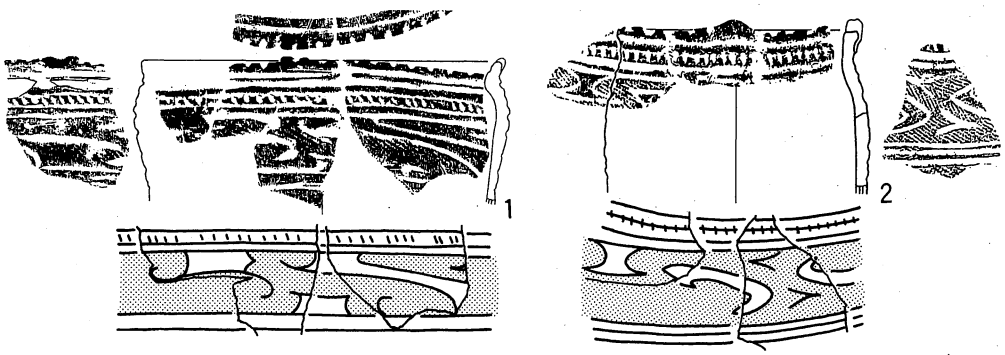
第３図　配置文の種類と配列（藤沼1989より）

るのが原則である、③充填文の形や配置状況を見ると、区画文や配置文の形と対応し、生み出すべき文様が一定幅の曲線的な縄紋帯から構成されるように工夫されている、④区画文・配置文・充填文と生み出される文様部は磨消部・縄紋部或いは削平部・隆帯部の対照で表現される、⑤区画文や配置文の種類は２・３の特殊な器形を除けば、特定の器種や器形に限定されることはない、と以上の５項目にまとめられた。この他に区画文・配置文＋充填文の組み合わせを一単位として、この単位の反復により施文域内を割り付ける点も特徴の一つとしてよいであろう。藤沼氏の分析は多種の文様を例に出し、その描き方の原則を導くことに重点を置かれた為、時間的な変遷や地方差等には言及されていないが、「東北地方以外の地で発見され、亀ヶ岡式土器と推定されるものが、本場と同じように正しく描く手順を追って、原則を守りながら描いているか興味がある。これは亀ヶ岡式土器の分布圏を考える時に役に立つであろう」と問題提起されている。

以上より大洞式雲形文の分析にはネガ文様による文様の把握が有効であることが理解されよう。ネガ文様から見ると大洞式雲形文の施文原則は、藤沼氏が示された５項目ということができそうである。次章ではこれらの原則を念頭において、寺野東遺跡より出土した「大洞Ｃ２式」をネガ文様及びネガ文様配置を中心に検討しよう。

Ⅲ　寺野東遺跡における「大洞Ｃ２式」土器群の分析

それでは具体的に土器群の分析に入ってゆきたい。寺野東遺跡の大洞式土器は「大洞Ｃ２式」に比較的まとまりが確認でき、量的にも他時期を凌駕している。また特徴的な変化が見られる土器も観察されていることから、この時期を分析の対象とするが、一部「大洞Ｃ１式」の資料も含めて検討する。鈴木加津子氏の編年に照らし合わせれば、主に南奥大洞Ｃ２式第Ⅰ～Ⅱ段階のもので、浅鉢に頸部無文帯が出現する以前の土器群である（鈴木1990他）。寺野東遺跡の晩期土器群は環状盛土遺構及び谷部の遺構より多く出土しているが、層位的或いは遺構一



1：S＝1/4
2：S＝1/3

第４図　深鉢第一類

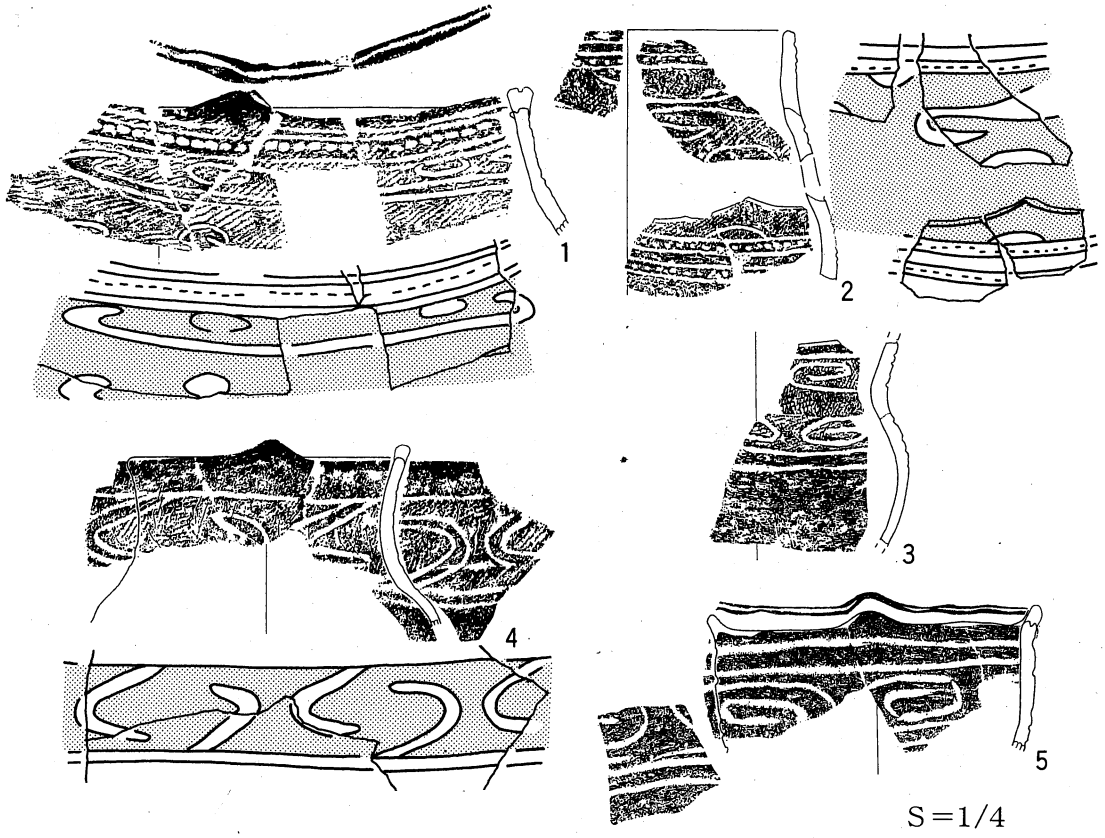
括として共伴関係が捉えられたものはない。それゆえここでの分類は、型式学的なまとまりとして捉えられるものに重点を置いている。以下、器種毎に代表例を挙げて説明する。

ａ：深鉢

本遺跡の「大洞Ｃ２式」は「大洞Ｃ１式」で数えるほどに減少した深鉢が増加する傾向にある。器形及び文様施文の特徴等から、大きく２つに分類することが可能である。

第一類（第４図）は区画文・配置文、充填文により文様が構成されているもので、充填文も点対称に配置され、比較的原則的な文様配置を確認することができるものである。器形的には口縁部が短く外反するものが多い。１は鉢形に近い器形で、口縁部は刻みにより小波状を呈し、口縁内面には一条の沈線文が巡る。二溝間の截痕下には区画文Ｃ１＋充填文の四角文、ノの字文による文様が確認される。四角文は上下点対称に配置され、末端がのの字状に巻き上がっているのが特徴的である。浮彫的な施文の土器で、器面調整も丁寧に為されている。２は頸部に溝底の刺痕を配し、配置文ＣⅡ＋四角文（鼓状）・くの字文によって描かれるものである。くの字文は施文域区画線に接してはおらず、点対称に配された三叉文的な印象を受けるものである。上位の区画線に接する四角文も見られるが、破片資料の為くの字文との相関が確認できない。文様の施文は浮彫的な表現に欠けるものである。その他の第一類は配置文ＡＩ、ＣＩ或いはＣⅡ、Ｄ３等によるものが多く見られるようである。

第二類（第５図）は配置文と充填文による文様構成と捉えられるが、文様は大きくデフォルメされたものである。また充填文が点対称的に配置されないものや充填文が施されないもの等も見られ、配置文と充填文の関係性に乱れが生じている。器形的には直立或いはやや内傾気味に立ち上がるもので、最大径は体部下半に位置し、この最大径付近までを広く施文域としている点も特徴的である。１はかなり大形の土器で、口縁部下に沈線間刺突列を配している。これは２にも認められるもので、恐らく二溝間の截痕又は溝底の刺痕と対応するものであろう。体部上半のみの残存の為、下位の施文域区画線は確認できないが、区画内には配置文Ｃ類＋楕円文により文様が描かれる。この配置文Ｃ類はかなり横方向に伸長している。また充填文である楕円文は区画線から遊離しているものも見られ、配置文を挟んで線対称に配される点等は、充填文の点対称配置の原則から外れている。広い施文域であることを考慮すれば２段縦列の配置文構成になるかもしれない。２は恐らく配置文Ｄ類に類する文様が配されるもので、施文域区画線に接する半円文が確認される。この土器は下位の施文域区画線が確認でき、沈線間刺突列が２段配されている。広い施文域であること、体部中位にも半円文が施されること等から、恐らく配置文が２段に施されるものであろう。３は口縁部を欠くものであるが、上下を２本の沈線で区画された広い施文域を有するもので、施文域内は縄紋が施され、沈線による渦巻文が確認できる。これは配置文Ｃ類を沈線により表現したものと捉えることができ、１・２と同様に

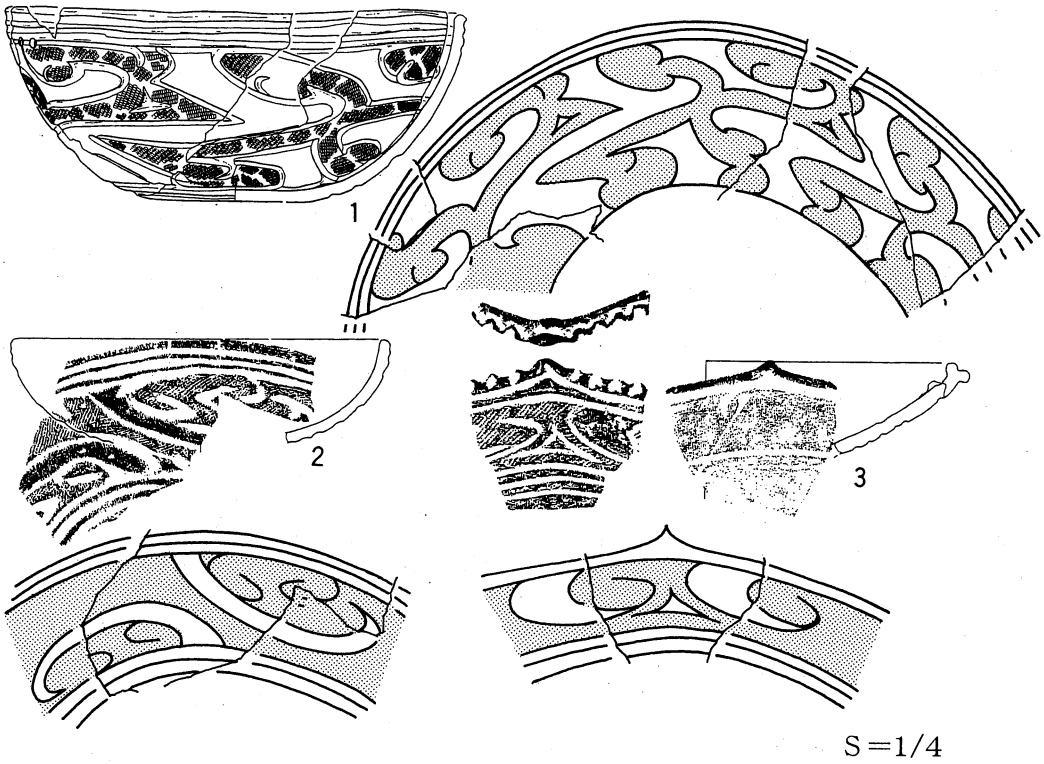


第５図　深鉢第二類（１～４）と「横位並列文様」（５）

２段縦列の配置を推定できる。この配置文Ｃ類は２段背合わせ状で、体部中位を基準として線対称に配置されており、雲形文本来の点対称配置とはならない。４は頸部に１又は２本の沈線で画された施文域が配され、施文域内には大きく変形してはいるが“く”の字状の配置文ＡⅣが施されている。“くの字文”が上下の区画線に交互に接している点に配置文ＡⅣの構成を窺うことができるものの、充填文は施されず、配置文自体が主文様として認識できるであろう。

本類に見られる特徴は、口縁部に山形状の突起を配し（１・４）、口唇部には一条の沈線が巡るものがあること（１）、器壁が厚手で、胎土も俠雑物の多い粗なものであること、広い施文域を持つこと、施文は浅い沈線によるもので、彫刻的な印象は皆無であること、等が挙げられる。充填文は使用されないか、独特のモチーフのものが用いられるようである。また充填文の簡素化及び省略化に伴い、本来施文域内を割り付ける役割であった配置文自体が主文様としての単位文と認識できる傾向がある点も特記される点の一つであろう。

ｂ：浅鉢



第６図　浅鉢第一類

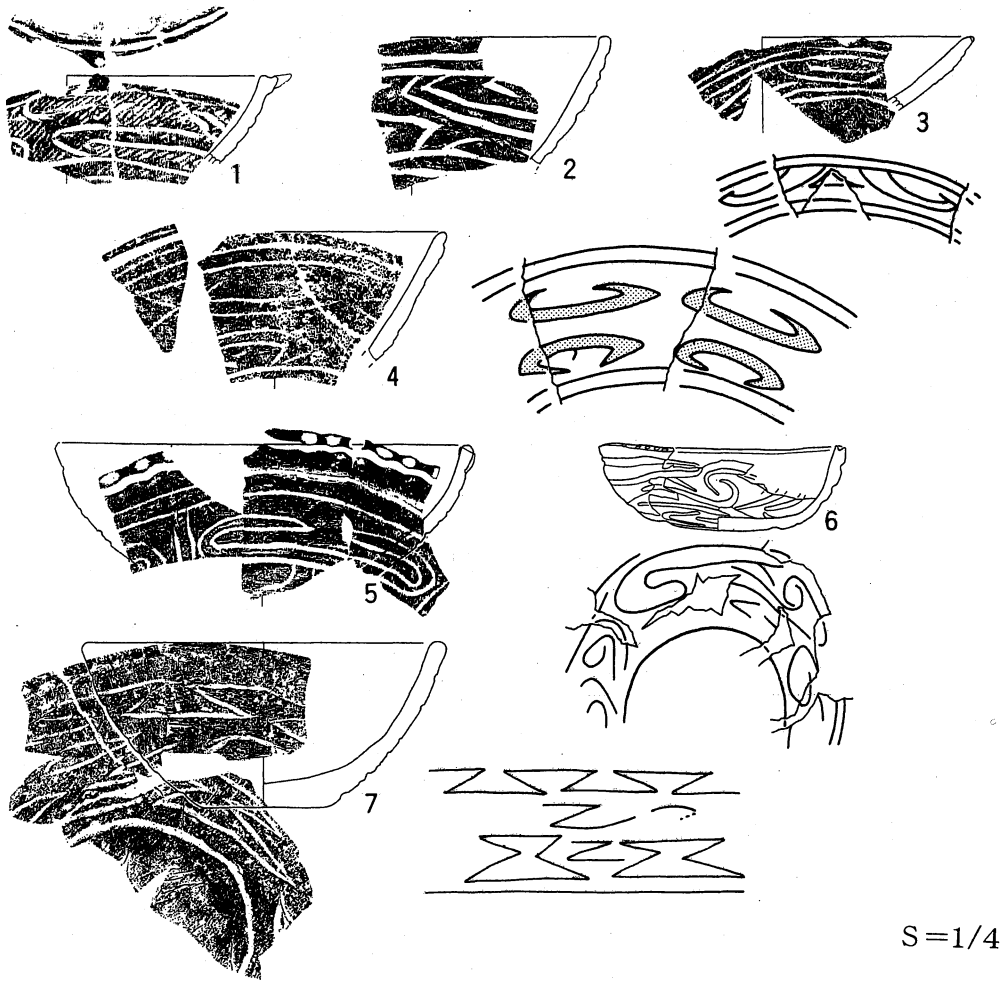
浅鉢についても深鉢と同様の特徴が確認でき、第一類・第二類に分類される。文様施文域は底部付近までを施文域とするものと体部中位で区画されるものの２者があり、口縁部形態は口唇に文様を配するものと単口縁のものがある。単口縁のものの方が内湾気味に立ち上がる傾向がある。いずれも二溝間の截痕及び溝底の刺痕は施されない。

第一類（第６図）は配置文＋充填文により文様が表現され、文様配置は比較的原則的（点対称的配置）なものである。１は「大洞Ｃ１式」で以下のものに比べればやや古手のものであろう。区画文Ｂ２＋充填文が点対称に、且つ規則的に配され、区画文にはノの字文が接している。本遺跡の雲形文で区画文Ｂ種は殆ど確認されない。また上位の区画線に接して配される充填文は配置文Ｂ類に類似する。２は配置文ＡⅣ＋ノの字文で文様を構成するもので、充填文はノの字文以外は確認できないが、末端の巻き込みが大きく、渦巻文のようにも見える部分がある。浮彫的な表現で、磨消部のミガキ等丁寧に作られている。３は山形状の突起を有し、口唇部に刺突列を配するもので、内面下半には沈線が巡る。文様は恐らく配置文ＡＩ＋三叉文により構成されよう。その他の破片資料では配置文Ｄ類も比較的多く見られ、充填文では三角文・三叉

文・四角文・ノの字文等が確認されるが、一個体に多種且つ多用に施されることはない。配置文Ｃ類も確認されるが、第二類と比べると数量的にやや少ないようである。

第二類（第７図）は区画文・配置文と充填文により文様が構成されるものであるが、縄紋が充填されないものが多く、また配置文と充填文の関係性が崩れ、点対称的な配置が見られなくなるものである。充填文は独自のモチーフが確認されるか、または施されないものも多い。器壁は厚手で、器面調整や施文手法は粗雑である。

１は配置文Ｄ類＋ノの字文で構成されるもの、３は配置文Ａ類と充填文の三角文によって文様が描かれるものである。２は区画文Ｃ類と充填文のノの字文よりなる文様と推定したが、或いは配置文ＡⅣの可能性もあろう。１の口唇部には一条の沈線が巡り、山形状の突起が確認される。口縁部直下より施文域を配するもので、施文域内には無節Ｌ縄紋が施される。配置文は



第７図　浅鉢第二類

Ｄ類としたが、藤沼氏が示した模式図等で見るものより横位に平行線化している様子が窺える。３は狭い施文域内に配置文Ａ類による施文がなされるものであるが、配置文Ａ類は充填文の三角文付近を基準として線対称に配置されるようであり、点対称配置の原則が保持されていない。

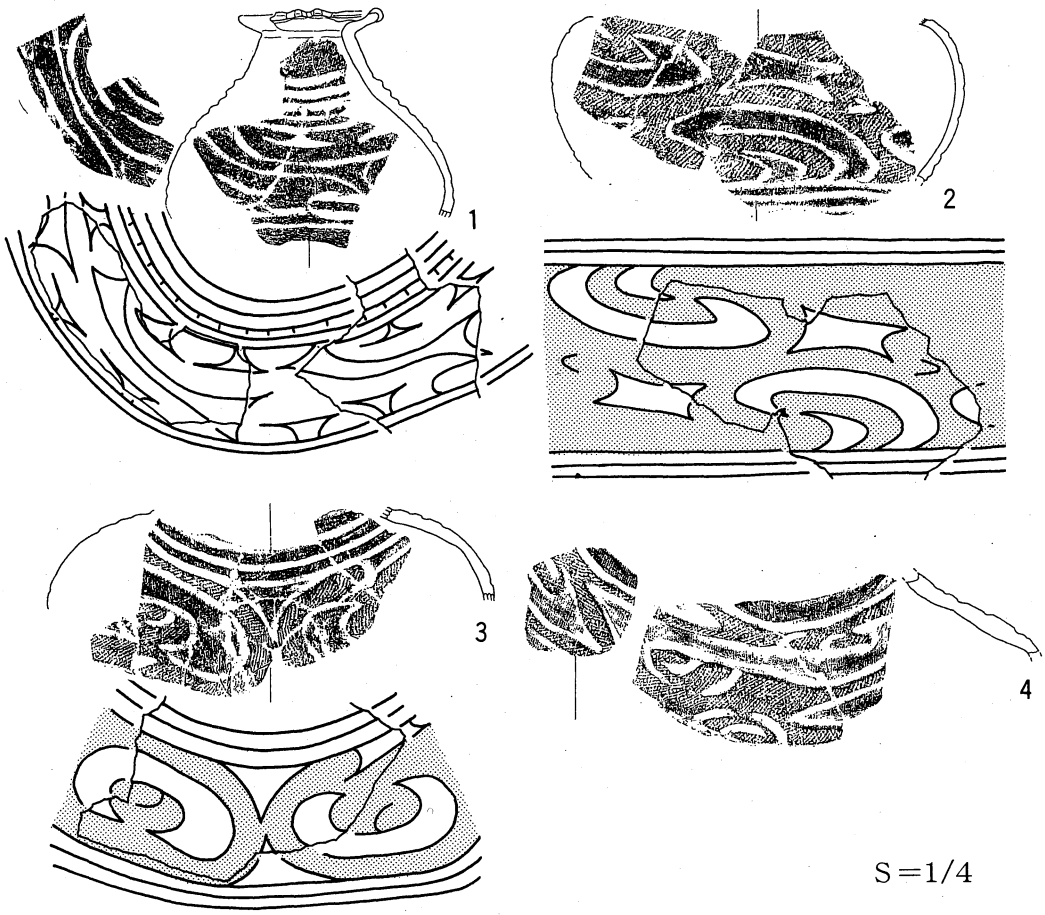
４は配置文Ｃ類が２段背合わせ状に配されるものである。口唇部には浅い沈線が巡るようであるが、部分的にしか見られない。配置文は施文域中位を基準に、線対称的に２段背合わせ状に描かれており、本来的な施文原則とは別な、配置文の線対称的な配置が確認されるものである。また、器面の摩滅が著しく不明瞭な点があるものの、配置文の“Ｃ字文”に無節Ｌ縄紋が充填されているようであり、本来的には施文域内を割り付ける役割の配置文が、それ自体単位文に変化した様子が窺える。５は施文域内に縦の区画線を持つ点が特徴的な土器で、縦に区画された中には配置文Ｃ類が大きく描かれ、配置文Ｃ類の下にはπ字状に弧線文が接している。文様帯中に縦位の区画線を伴うものは、東北中部以北の大洞Ｃ２式壺等に見られるものであり、本例はやや時期が下る可能性もあろうか。口唇部には押圧による刺突と山形突起が見られる。この土器も恐らく縦の区画線を基準にして線対称に文様が配されるものであろう。

６・７は配置文及び充填文に類した文様が確認できるものの、同一配置文の反復による割り付けや、配置文・充填文の点対称的な配置等は見られず、文様構成の把握が困難なものである。単沈線文様と捉えられる部分もあり、次章以降で示す土器群に近い様相を呈している[(3)]。７は底部付近までを施文域とするもので、細く浅い沈線によって充填文の四角文（台形状）に類する文様が施されている。欠損部分が多く不明瞭な部分も含むが、第３図に見られるような配置文は存在せず、上下の充填文間にはＺ字状のモチーフが確認される。上位の四角文は区画線と一体的に、連続的に描かれるものであるが、下位の四角文は区画線より遊離し、他の充填文と合体して鼓状の文様を形成しているように見える。本来充填文である四角文が主文様的な在り方を呈している。６は配置文Ｃ類に類似したモチーフが大きく描かれ、配置文Ｃ類を基本にした文様と推定したが、他に同様のモチーフは確認されず、末端の入り組む沈線文や渦巻き状の文様、くの字状のモチーフ等が不規則に配され、雲形文の特徴である同一配置文の反復による施文域内の割り付けはなされない。施文域の区画線は確認できず、口縁直下より文様が配される。器面調整、沈線施文も粗で、口唇部には比較的細かな刺突が配されている。

第二類では配置文Ａ類・Ｄ類も確認されるもののＣ類が多く、特に変化の度合いが著しいものでは配置文Ｃ類が多用される傾向にあるようである。この配置文Ｃ類は、安行３ｄ式の中にも取り入れられることがあり、配置文Ｃ類は型式を越えて施される文様であるともいえよう。

ｃ．壺

壺についても、大きく２つに分類することが可能である。分類の視点については深鉢・浅鉢と同様で、文様の変化の度合いによっている。



第８図　壺第一類

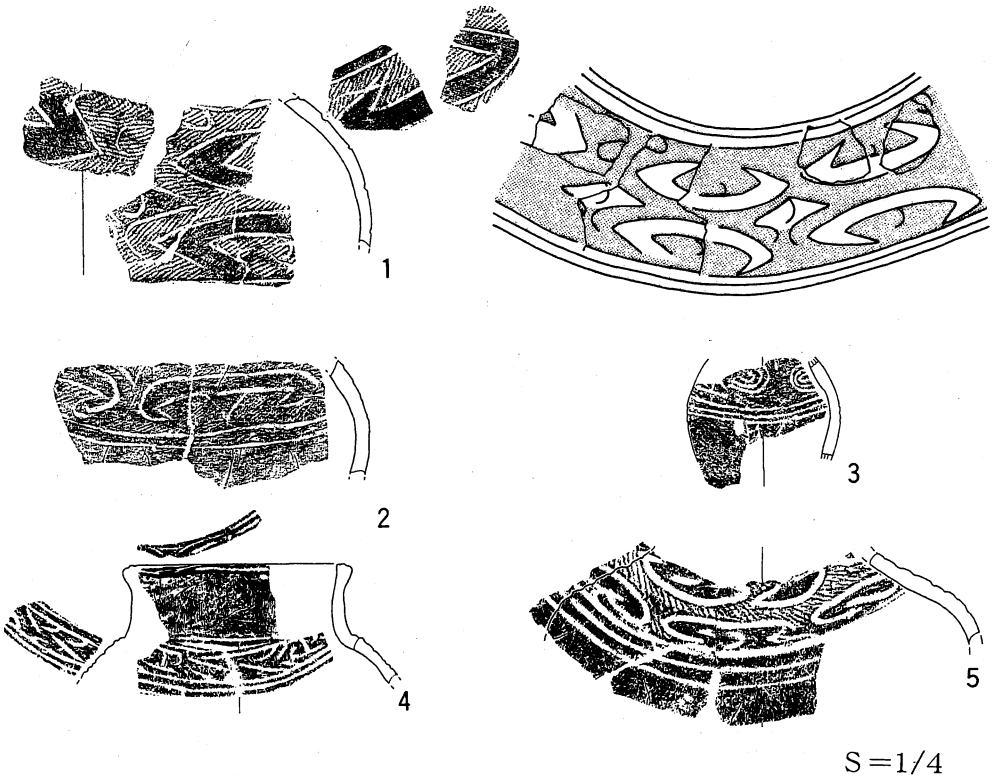
第一類（第８図）は比較的原則的な雲形文が施文されるものである。口縁部からの全形が判明するものは少なく、わずか数点に留まっている。

１は頸部に二溝間の截痕が配されるもので、縄紋は施されないが、器面調整・胎土とも良好なものである。文様は区画文Ｃ１＋充填文の三角文により構成され、区画文を挟んで点対称に三角文が充填されるようであり、比較的原則的な文様と言えよう。しかし充填文は三角文の一種類のみで、簡素な印象を受ける。また欠損により不明瞭ではあるが、区画文は施文域区画線から遊離しているようにも見え、配置文に近い様相を示していよう。

その他本類で確認される文様は配置文Ｄ類＋ノの字文、配置文Ｃ類＋ノの字文・三角文・四角文、配置文Ａ類＋ノの字文・四角文等で、文様の施文は沈線が深く彫刻的であり、以下に説明する第二類に比較すると丁寧に作られている印象を受ける。２は配置文ＡⅣ＋ノの字文・四角文（菱形状）・くの字文による文様で、施文域が体部下半にまで及ぶ点が特徴的である。充

填文の四角文・くの字文は施文域区画線より遊離している。３は配置文ＣⅡ＋三角文・ノの字文・四角文（台形状）よりなる土器であるが、配置文Ｃ類に三角文・ノの字文が組み合うことによって、前浦式に類似した文様を構成している。配置文Ｃ類の“Ｃ字文”内側の縄紋施紋部である楕円文にノの字文が組み合うことで、前浦式の“のの字文”に近い文様を作り出し、ポジ文様としてみれば楕円枠状文内に“のの字文”が配される前浦式と類似する文様になっており、これ自体が一つの単位文として、並列的に配置されるようにも捉えられる。前浦式と異なる点は３の“のの字文”は、楕円枠状文相当縄紋帯の下位及び上位の一方にのみ交互に接していることであり、前浦式では上下両方に接することが多い。３では配置文の点対称配置の原則が保持されている為であり、両者は類似する文様ではあるが、施文原則に差異があることが知れる。４は配置文Ｄ類が２段施されている可能性がある。磨消部のミガキ調整は著しい。

第二類（第９図）は「大洞Ｃ２式」文様を施文するものであるが簡略的であり、充填文は第一類では見ることができない独特のもの（例えば菱形文等）が採用される。器壁は厚手で、施文沈線は浅く、彫刻的な印象を受けることはない。また縄紋が施されないものも比較的多く確認できる。器面調整も粗く、第一類に比較して稚拙である。主体となる文様は配置文Ｃ類であり、それ以外の文様は殆ど見ることができないようである。このような文様の選択性は深鉢・



第９図　壺第二類（１・２・４・５）と「横位並列文様」（３）

浅鉢でも確認でき、第二類土器の特徴の一つであるといえよう。

２は配置文Ｃ類＋三角文による構成の土器である。恐らく配置文は１段で横位並列的に配置され、構成的には第８図３に近いものであろうが、配置文が三角文付近を基準として線対称に配置される点に違いを認めることができる。“Ｃ字文”の内側（下側）に充填文の三角文が接している点も特徴的である。１は配置文Ｃ類＋ノの字文による施文の土器である。他に菱形状の充填文も確認されるがはっきりしない。“Ｃ字文”は２段背合わせ状に配置される。これは体部中央付近を基準とした線対称的な配置と捉えられ、、雲形文本来の点対称配置の原則とは相違する。また配置文・充填文では文様描出沈線の一部が閉合しない部分も確認できる。

次の２点は単沈線表現の手法をとるものではあるが、「大洞Ｃ２式」壺第二類に含めた方が適当であろう。４は口縁部が直立的に立ち上がり、頸部が幅広く、口唇部に沈線文が巡る広口壺状のものであり、上記してきたような「大洞Ｃ２式」壺の器形とは様相を異にする。体部上半に配された幅狭い施文域には、単沈線によりくの字状の文様が描かれている。くの字文の一方が施文域区画線に接することから、配置文Ａ類を沈線で表現したものとも考えられる。５は楕円文を２段交互に配するもので、深鉢第二類（第５図１）に見られる充填文と類似する。上位の区画沈線部分が欠損している為不明確ではあるが、上下の楕円文は区画沈線に近接するものの接してはいないようである。楕円文とはいっても末端が接続しているものはなく、端部は釣り針状に巻き上がっている。配置文に相当するものは確認されない。

本章では寺野東遺跡出土の「大洞Ｃ２式」土器をネガ文様及びネガ文様配置を中心に観察してきた。それによって各器種とも大きく２つの分類群を確認することができ、それぞれに特徴的な様相を呈することが推定された。以下に簡単に整理してみよう。

Ⅳ　寺野東遺跡における「大洞Ｃ２式」文様

ここで本遺跡における「大洞Ｃ２式」文様についてまとめておきたい。以上のように各器種において、ネガ文様やネガ文様配置、施文手法等から２つの分類群を確認することができた。

第一類は区画文・配置文と充填文により文様が構成され、それぞれが点対称に配置される点等から、おおよそ雲形文の施文原則が保持されているものである。文様割り付けやモチーフの細部では異なる部分も見られるが、大きく大洞Ｃ２式文様の印象を損なうものではない。施文手法についても沈線描出や器面調整等、第二類に比較すると丁寧になされている。

第二類は配置文・充填文により文様が構成されるものではあるが、文様配置上に変化が見られるものである。施文域中の縄紋施紋がなされなかったり（特に浅鉢に多く確認される）、施文域の拡張（深鉢において確認）等も看取される。

文様は「大洞Ｃ２式」の配置文が用いられているが、簡略化したものであったり、横位の伸

長が著しいもの等が見られる。これらの配置文は点対称に配置されて施文域内を割り付けるものばかりではなく、２段縦列、つまり施文域の中位を基準に上下に線対称的な配置がなされるものや、配置文が左右に線対称的に配置されるもの等が確認され、配置文による施文域内の割り付けに変化が見られる。

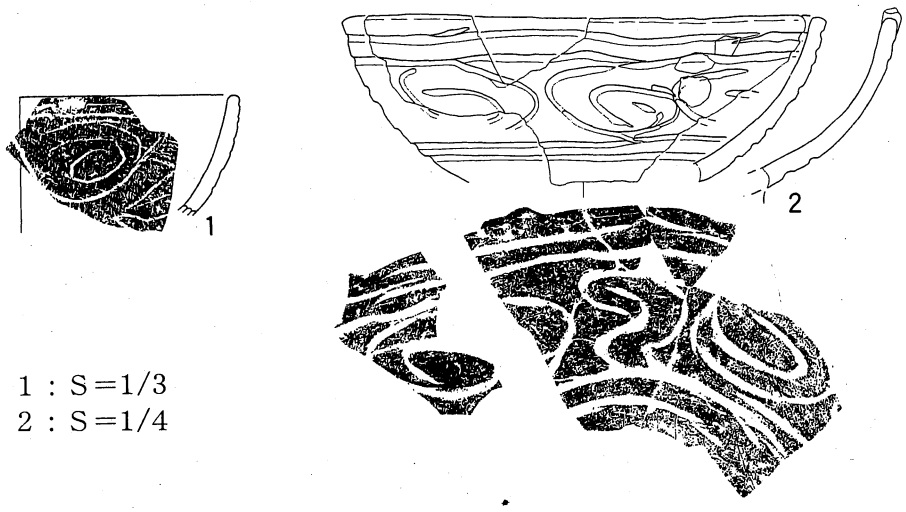
充填文では第一類で確認できなかった独自のモチーフが現れ、点対称的配置の原則も遵守されていないものが多い。また充填文が確認されないもの、或いは存在してもノの字文等一種類が簡単に配されるものが大多数を占めるようになる。このような充填文の簡素化及び省略化により、本来施文域内を割り付ける役割を有していた配置文が強調され、主文様的位置を獲得することにより、配置文自体が単位文として認識されるものと推定できる。特に配置文Ｃ類においてこの傾向が顕著である。つまり第二類のある種の土器では配置文自体に変化が生じ、単位文化した配置文が線対称的に配置されることにより、横位に並列的な文様構成が得られることとなる。この構成を単位文的並列配置構成と称したい。単位文的並列配置構成は文様こそ異なるものの、次章で示す「横位並列文様」土器群にも通じるものである[4]。

第一類では配置文Ａ類、Ｃ類、Ｄ類が認められるのに対し、変容の度合いの大きい第二類においては、殆どが配置文Ｃ類に限られるという配置文の選択性も確認される。また安行３ｄ式の中には、文様内に大洞Ｃ２式のモチーフが採用される土器も時折見ることができるが、その文様も配置文Ｃ類或いは配置文Ｃ類に類するものであることが多いようである。また前述したように、配置文Ｃ類は前浦式文様との関係性も窺われる。配置文Ｃ類は型式を越えて広く用いられる文様であり、型式間交渉の一証左として捉えることも可能であろう。

Ｖ　寺野東遺跡における「横位並列文様」土器群

では「大洞Ｃ２式」土器群の様相を確認したところで、問題となる土器について分析をはじめよう。ここでも器種毎に文様及び文様配置を中心に見てゆきたい。

第５図５は単沈線によって文様が描かれる深鉢である。しかし口縁部下に上下を１～２本の沈線で区画された施文域を配する点は、同じ単沈線で文様描出される安行３ｄ式には確認できず、上記してきた「大洞Ｃ２式」第一類・第二類土器群により近い様相を呈するものということができるであろう。器形は口縁部が短く外反する鉢形に近いもので、口縁部には山形突起が配され、口唇部に沈線を巡らせる点でも「大洞Ｃ２式」深鉢第二類（第５図１）と共通する部分がある。器面はミガキ調整がなされるものの粗雑である。文様は欠損部分が多く不明瞭であるが、単沈線による渦巻文が単位文的に並列配置されるものである。向かい合う渦巻文の末端は或いは連続するものかもしれないが（その場合は配置文ＣⅡを沈線で表現し、且つ末端を渦巻き状に処理したものと考えることもできる）、拓本左側で渦巻文の端部が確認されているこ



第10図　「横位並列文様」土器

と、及び浅鉢や台付鉢脚部等に渦巻文が見られることより、これを単位文であると推定した。縄紋が欠落し、単沈線表現による文様である点は安行３ｄ式と類似する部分であるが、安行３ｄ式では渦巻文のような文様は存在せず、また一つの文様要素の並列配置のみで文様が構成されないことから、単純に安行３ｄ式との関連性のみで判断できない部分があろう[6]。

第10図は単沈線表現によって文様が描かれる浅鉢で、上下を１～２本の沈線によって区画される点や体部上～中位に配置される点等、文様施文域の点では「大洞Ｃ２式」浅鉢第一・第二類と同様の構成を持っている。口縁部は単口縁によるものが多いが、突起を持つものや、口唇部に沈線を巡らせるもの等も存在する。

文様は単沈線による渦巻文、または楕円文が、単位文的に配置されることを特徴とする。１は浅く細い沈線により、渦巻文と稲妻状の沈線文が描かれるものであり、一部に無節Ｌ縄紋が充填される部分が見られる。２は比較的残りの良い個体であるが、接合しない大形破片２点よりの推定復元である為、全体の文様構成では不明瞭な部分もある。渦巻文を中心とした区画内の文様は、上位または下位区画線に接するように配置され、区画線と一体的に描かれる部分もあるが、それらが横位に並列して配置されている。また別の部分では下位区画線から伸びる２本沈線が入り組む文様や、２本沈線により構成されるＣ字文に近いモチーフ等も確認でき、「大洞Ｃ２式」配置文Ａ類に類似する部分も認められるが、これらの反復による文様割り付けは確認できず、「大洞Ｃ２式」とは異なる様子が理解される。

第９図３の壺は頸部以上を欠損するもので、３本沈線による施文域下位区画線が確認できる。施文域内には渦巻き状の文様が単位文的、並列的に配される。縄紋の施紋は見られない。

以上の土器群の各構成要素を見てみると、頸部～体部上半に配置される上下を横位沈線等で

区画された文様施文域については「大洞Ｃ２式」の文様施文域に対応するものと捉えることができよう。また文様配置は「大洞Ｃ２式」第二類の特徴である単位文的並列配置と同様のもので、この点からも「大洞Ｃ２式」との関係性が推定される。しかし施文される文様は単沈線描出による渦巻文或いは楕円文で、この文様自体が配置文としての役割を負うものではなく、また「大洞Ｃ２式」第一類及び第二類に見られたような、配置文による施文域内の割り付けやネガ・ポジの対照による文様表現は確認されない。縄紋が欠落する点も含め、これらは安行３ｄ式との共通点と捉えることができるが、安行３ｄ式には渦巻文のようなモチーフは存在しない。また安行３ｄ式では、「三角形区画構成」「菱形構成」（鈴木1992）のいずれにおいても複数種類の文様要素が組み合い、横方向への連続性が強い文様構成が一般的で、単一要素の単位文的な配置はなされない傾向にあり、文様表現上での類似点は認められるが、文様配置法においては差異が大きいことが窺える。

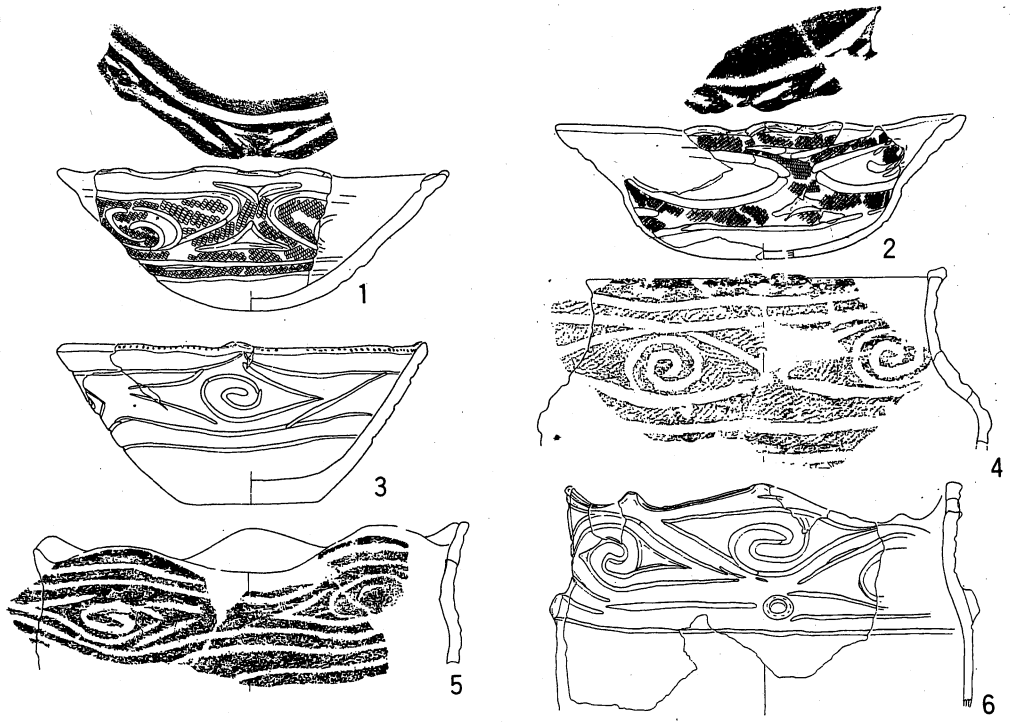
よって本章で示した土器群は「大洞Ｃ２式」的な施文域を持ち、「大洞Ｃ２式」第二類と共通する単位文的並列配置によって文様配置するもので、以上の点からは「大洞Ｃ２式」的な様相が窺えるものである。しかし安行３ｄ式と共通する単沈線文様（渦巻文）を用い、また大洞Ｃ２式のネガ・ポジ対照による文様表現とは相違した文様表現方法による点は、「大洞Ｃ２式」とは一定の距離を持つもので、安行３ｄ式をはじめ他型式との関係性を視野に入れて検討する必要がある。これらの土器群を仮に「横位並列文様」土器群と称し、更に分析を進めよう。

Ⅵ　安行３ｄ式・前浦式における文様の単位文的並列配置の確認

前章では単沈線表現による渦巻文を、単位文的並列配置によって配置する「横位並列文様」土器群を示した。次に本遺跡の安行３ｄ式・前浦式及びそれに類する土器群の中に、単位文的並列配置による文様構成を確認し、「大洞Ｃ２式」第二類及び前述した「横位並列文様」土器群との関係性を考えてみたい（第11図）。

４は口縁部が直立的に立ち上がる深鉢で、前浦式に見られる器形に類似する。上下を２本の沈線で区画された地縄紋の施文域内には、同図１と類似する沈線による菱形文＋渦巻文の文様が描かれ、器形及び文様から大きくは前浦式の中で捉えられるものであろう。渦巻文は菱形文と一体的に描かれている。この文様は施文域内に単位文的に並列配置されており、「横位並列文様」土器群と構成上類似したものになっている。

５は５単位の波状口縁深鉢であり、やや寸胴ではあるが安行式的な器形である。体部に巡らされた横位沈線以上を文様施文域とし、単沈線による文様描出であることからも、おおよそ安行３ｄ式と捉えられるであろう。口頸部では口縁形状に平行するように沈線が波状を呈して一周し、またそれに対応するように体部の横位沈線が波状をなして、頸部に横位の区画空間を形



第11図　安行３ｄ式・前浦式の中の単位文的並列配置の例

１～３：Ｓ＝1/4
４～６：Ｓ＝1/5

成している。これを「横位並列文様」土器群に見られるような文様施文域と捉えることも可能であろう。施文域内には一筆描き状に菱形文と渦巻文が描かれ、それらは波頂部各単位下に並列的に配置されている。以上の例以外にも菱形文・楕円文＋渦巻文・のの字文は、本遺跡の大きくは安行３ｄ式と捉えられる土器群において単位文として文様中に取り入れられている。

次に施文域内に単位文的に配される単沈線表現の菱形文（楕円文）＋渦巻文の生成について考えてみたい。１は内面文様を持つ浅鉢であり、器形及び内面沈線の施文等、全体的には前浦式に一般的に見られるもの（例えば２等）に類似する。前浦式と大きく異なる部分は等幅縄紋帯（猪瀬1999）による文様表現ではなく、縄紋地上に単沈線でモチーフを描いている点である。単沈線で表された文様は楕円状の区画内に、渦巻き状の文様が一筆描き状に描かれている（一部途切れる部分もある）もので、これは前浦式の代表的文様である楕円枠状文＋“のの字文”の等幅縄紋帯部分を、単沈線表現によって置き換えた場合に生じる文様と推定できよう。またこの土器は口縁部直下が無文帯となっており、沈線による文様は安行３ｄ式のように区画のない口縁部直下の施文域に配されている。３は縄紋の充填は見られないが１と同様の文様が描か

れるものである。口唇部には刺突列が巡り、口縁部の山形突起からは弧線が垂下する。突起下には菱形状の文様が沈線によって描かれており、恐らく内傾する前浦式直前型式深鉢の文様と同様のモチーフを浅鉢に、且つ沈線のみで描いたものであろう。菱形区画内の入り組み三叉文は沈線によって一筆描き状に連続的に描かれ、“のの字文”に近いものになっている。

以上の例から、前浦式直前型式及び前浦式文様を安行３ｃ・３ｄ式の施文手法である単沈線によって表現した場合に、沈線による菱形文・楕円文＋渦巻文の文様が生じることが推定され、またこのモチーフ自体が一つの単位文として存在している様子が窺える。前章で示した「横位並列文様」土器群は単沈線で渦巻き状のモチーフを描く点で類似する部分があり、上記した沈線表現の前浦式文様がより簡略化された形で施文されたものと推定することも可能であろう。６は一筆描き状の菱形文＋渦巻文が安行３ｄ式の施文域の中に取り入れられたものである。器形的には５と近く、文様は単位文的に、辺をそろえるように交互に配置される。

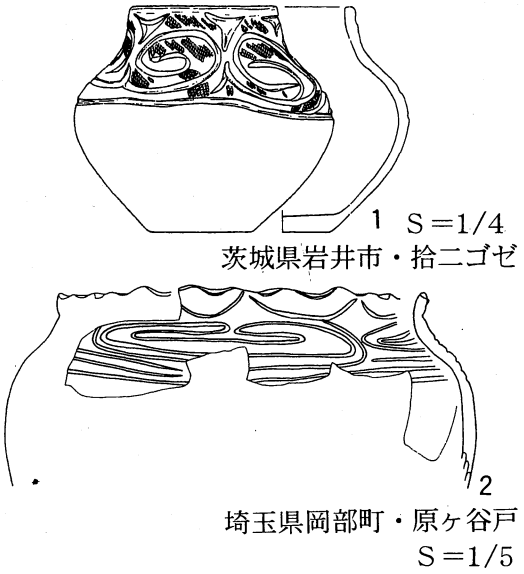
以上を整理してみると、４・５の土器は上下を沈線によって区画された施文域内に、単沈線描出よる文様を、単位文的に並列配置する点において「横位並列文様」土器群とほぼ同様の構成を持つものといえる。施文される文様は１～３で見られたように、文様描出法を違える安行３ｄ式と前浦式の密接な関係性の中から生じたものと推定される。

５はこのように生じた単位文を器面に並列的に配置するものであるが、それぞれが波頂部下に配置され、器形との強い関連性が推測される。前浦式直前型式及び前浦式において、文様は器形と一体的な単位性を有して器面に割り付けられるものであり、同じ単位文的並列配置構成を持つものではあるが、器形の単位性とは無関係に単一文様を反復的に並列配置する「大洞Ｃ２式」第二類土器群とは相違する部分がある。つまり５はそもそもの持つ“関東的な”配置原則による文様配置と解することもできるが、横位に連続性の強い前浦式文様が単位文として独立的に配される背景には、「大洞Ｃ２式」第二類で確認される単位文的並列配置構成と何らかの関係性を有しているものと推定されよう。

この点よりすれば「横位並列文様」土器は、同様に単位文的な文様配置を持つものではあるが、器形の単位性とは無関係に同一要素の単位文を反復する点において、より“大洞Ｃ２式的な”文様配置構成によるものといえ、「横位並列文様」土器群と本章で見てきた単位文的並列配置の土器群を単純に同義のものであるとすることはできないであろう。しかし両者は文様施文域及び文様表現・文様配置の上で、強い共通性を認めることができ、「大洞Ｃ２式」・安行３ｄ式・前浦式の、３者の相互交渉関係の体現された土器群として評価することができよう。以上のような型式間の関係性は単純に一方向的な、系統的な変化の中から生じたものではなく、文様・文様配置・施文手法等の重層的な相互変容により生じたものといえる。これらは三型式が併存する本地域での特有の在り方であるということもできようが、以下で示す例のように、

関東地方の他遺跡においても大洞Ｃ２式・安行３ｄ式・前浦式の重層的な構造を窺うことができる。

例えば茨城県岩井市・拾二ゴゼ遺跡３号住出土の壺形土器（第12図１）は、口縁部直下から体部最大径付近までの施文域に渦巻文を単位文的に並列配置し、間には三叉文を上下から貫入させているもので、安行３ｄ式の施文域、単沈線表現の渦巻文、「大洞Ｃ２式」の文様の単位文的並列配置等、各型式と関係する文様構成を読みとることができる。第12図２は埼玉県原ヶ谷戸遺跡出土の深鉢であるが、安行３ｄ式の施文域に大洞Ｃ２式配置文Ｃ類と近似する文様を配するもので、安行３ｄ式と大洞Ｃ２式との関係性が窺われる。



第12図　他遺跡における例

Ⅶ　まとめ

今回は、寺野東遺跡より出土した大洞Ｃ２式期土器群を分析することにより、「大洞Ｃ２式」土器に見られる様相を確認することはもちろんのこと、寺野東遺跡で特徴的に見られる土器群を通じて、大洞Ｃ２式期に併存する型式間の関係性を捉えることを課題に分析を進めた。以上の作業により「大洞Ｃ２式」では各器種ともに２つの存在形態が確認できた。両者は大きくは共時的に存在し、相互に関係するものと考えられるが、第二類に見られた文様配置の変化（線対称配置構成）は、第一類の本来的な文様配置からの自律的な変化の中から生じたものと捉えることも可能であろう。

第一類と第二類では施文される文様に選択性が見られ、変容のより著しい第二類においては配置文Ｃ類を多く採用する傾向がある。この文様の選択性は安行３ｄ式に取り入れられる大洞式文様についても当てはまり、配置文Ｃ類文様が型式間交渉に大きく関わっていることが推定される。また配置文Ｃ類は、三角形充填文と共に配置されることにより前浦式文様との類似性も指摘でき、「大洞Ｃ２式」と前浦式との関係性を考える上でも重要であろう。

また第二類の配置文の中には、施文域中位を基準に上下、左右に線対称的に配置されるものがあり、本来的な大洞式雲形文の点対称配置の原則とは大きく相違するものである。これにより文様の単位文的並列配置構成が表出され、この文様配置構成は「横位並列文様」土器群等に

おいて積極的に用いられる。

「横位並列文様」土器群においては施文域、文様及び文様配置の上から「大洞Ｃ２式」のみならず、安行３ｄ式・前浦式の、３者の重層的な関係性を窺うことができた。またおおよそ安行３ｄ式・前浦式と捉えられる土器群の中にも単位文的並列配置構成を持つものがあり、これらは「横位並列文様」土器群と共通する施文域・文様・文様配置の特徴及び型式間の関係性が見られることが理解された。このような型式間の関係性により生じる土器は様々な形で存在し、今回提示した土器はその一部にすぎないが、このような土器群の存在を明らかにしていくことに、それぞれの型式構造及びそれらの地域的な存在状態を解明する糸口があると考える。

今回扱った本遺跡の土器の多くは破片資料からの復元によるもので、文様配置の多くの部分を推定によっている点での不明瞭さは否めないと思う。時間差を伴う資料を一括的に扱っていることも問題があろう。また安行３ｄ式の文様配置原則についての分析が不十分であり、「大洞Ｃ２式」との比較に問題を残している点も今後の課題となろう。今回は他遺跡の土器群を含めての分析はなし得なかったが、今後は視野を広げ、型式間の重層的な構造を明らかにしてゆきたいと考えている。

本稿を為すに当たり以下の方々より御助言をいただきました。記して感謝の意を表します。
稲野裕介　江原英　押山雄三　鈴木徳雄　三沢正善（敬称略）

註

(1) 高橋龍三郎氏はネガ文様による文様単位の把握が分析の共通基盤となることに注目した。高橋氏の方法はネガ文様を主要素・副要素・補助要素の三要素で捉える。主要素は藤沼氏の区画文・配置文、副要素・補助要素は充填文に相当する。また高橋氏はネガ文様の組み合わせに地域差・年代差が反映されるものとして、ネガ文様による編年を試みている。本論では藤沼氏の方法に基づいて分析を試みた訳であるが、文様配置法に重点を置いた分析に用いるには若干不都合な部分があることも感じられた。また使用されている用語についても研究者によっては異なった概念で用いられることがあり、混乱を招く恐れもあろう。今後の分析においては自身の文様分類・分析方法を提示・使用することが不可欠であり、第一の課題としたいと考えている。

(2) 藤沼氏の区画文は稲田孝司氏の示されたものとは別の概念で用いられている（稲田1972）。

(3) この２例は単沈線表現による文様描出である点、後述する「横位並列文様」土器群と共通するが、文様・文様配置は相違し、「横位並列文様」土器群とは別の変化過程が想定される。

(4) 配置文の線対称配置は藤沼氏の配置文ＡⅡ、ＣⅠ類にも見られるものであり、本遺跡で特徴的に表れるのものではない。東北地方の資料を概観する限りでは、配置文の単位文的並列配置は鈴木加津子氏のいう第Ⅱ～Ⅲ期以降に多く認められるものであり、文様配置の変化が時間的な経過の中から生じた部分があることも窺われる。また点対称配置・線対称配置のいずれにもよらない配置法（例えば配置文ＡⅠ、

ＡⅢ等）も存在する。大洞式雲形文の文様配置の原則については地域的及び時間的な側面から更に検討を進めて行く必要があろう。

⑸　大洞Ｃ２式の中にも文様の単沈線描出が確認される例がある。例えば岩手県安堵屋敷遺跡出土の土器では、配置文を単沈線により表現し、壺や注口土器の一部には渦巻き状文が施文されるものも存在する。安堵屋敷例の配置文の単沈線化、及び配置文描出沈線の入組文化は次型式へ連続的な変化の一過程であると捉えられるが、このような土器群の影響から本遺跡の「横位並列文様」土器に見られるような文様が表出される可能性もある。第７図５のような縦位区画沈線を持つ文様は東北中部以北の壺の文様に多く確認されるもので、大洞式分布圏中心部との関係性を示唆しているようでもある。また福島県寺脇貝塚（馬目1966）に見られる“Ｑ群土器”との関係性も考慮しなければならないだろう。

引用・参考文献

稲田孝司　1972「縄文式土器文様発達史素描（上）」　『考古学研究』18－４
猪瀬美奈子　1999「前浦式土器文様の一形態」　『土曜考古』第23号
岩手県埋文センター文化財発掘調査報告書第74集　1984『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』
江原英ほか　1997『寺野東遺跡Ⅴ―環状盛土遺構・水場の遺構編』栃木県埋蔵文化財調査報告第200集
江原英ほか　1998『寺野東遺跡Ⅳ―谷部編』　栃木県埋蔵文化財調査報告第208集
鈴木加津子　1990～1994「安行式文化の終焉⑴～⑸」　『古代』第91～95号
高橋龍三郎　1981「亀ヶ岡式土器の研究」　『北奥古代文化』第12号
塙静夫　1955「晩期縄紋土器文化期に関する諸問題」　『下野史学』第７号
藤沼邦彦　1989「亀ヶ岡式土器の文様の描き方―雲形文を中心に―」　『考古学論叢Ⅱ』
藤沼邦彦　1994「文様の描き方―亀ヶ岡式土器の雲形文の場合―」『縄文文化の研究』５
馬目順一・渡辺誠ほか　1966『寺脇貝塚』　福島県磐城市教育委員会
村田章人　1993『原ヶ谷戸・滝下』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
宮原俊一　1996「拾二ゴゼ遺跡」『岩井市の遺跡Ⅱ』　岩井市史編纂委員会